

# 『俳諧玉言集』秋之部上

翻刻

杉田 美登

ここに翻刻する『俳諧玉言集』は、今日俳諧の全てが網羅されているはずの『俳諧大辞典』にも紹介されていないものであり、『国書総目録』によってみてもわずかに三点の現存が認められるのみである。しかし、そのいずれもが、端本であり、完全なものはない。ここに取り上げる原本は、上越市史編さんの折りに、榊原藩士の子孫で西沢家の蔵書中より遭遇したもので、現在は上越市高田図書館に所蔵されている。

鱸魚都里が参考にした俳書を見ると、蕉風伝達者として知られる各務支考の『笈日記』（元禄八年刊行）があげられる。芭蕉の作品と地方別に諸家の追悼句と作品を収録したものであり、このことから支考の蕉風流布の方法がみえてくる。上越では、元禄十七（一七〇四）年に支考の協力により『藁人形』を刊行している。また、宝永五（一七〇九）年七月より九月十三日まで当地に滞在し、『越の名残』を刊行していることから、魚都里にとって支考は身近な存在として感じたであろう。

さて、「発句の部」について、先鞭の収録俳書から順次見て行くと、風国編『泊船集』（元禄十年刊行）の五百二十二句所収である。次に元禄十二年から宝永六（一七〇九）年に掛けての稿で、土方による『蕉翁句集』の所収数、五五四句。さらに宝暦六（一七五六）年に四世井筒屋庄兵衛の寛治による『芭蕉句撰拾遺』七九二句となる。

そして、前号で述べた『俳諧一葉集』『俳諧玉言集』へとつながってゆくのである。このことは鱸魚都里が俳諧史を凝視し、出来うる限り収録しようと考えた芭蕉研究者であったといえる。本稿では、前号にひき続き「秋の部」の翻刻とする。

四十二丁

## 今朝の秋 初秋

### ○秋之部

張りぬきの猫もしるべし今朝の秋

拾遺 同上

一秋来にけり耳をたつねて秋の風

同上

初秋やたゞミなからの蚊屋の夜着

句集元四 泊船 句撰

### 鳴海眺望

初秋は海やら田やらみとりかな

此附合集歌仙あり

初秋や海も青田も一みとり

句集追加

### 七夕

須水草も乗物かさん天の川

拾遺

不なにがしの御代代官に隨身して四国へ赴く人に

四十三丁

七夕や驟すゝりの俄たび

もとの水

越後出雲崎にて 銀河序あり文章之部に出

荒海や佐渡に横たふ銀河

細道 句撰 泊船 句選 古撰

越後直江津今町にて

文月や六日も常の夜には似ず

細道 さるみの 泊船 句撰 古撰

附合集に一折

野童亭

七夕や秋を定むるはしめの衣 泊船 句撰 あらまき

合歡の木の葉こしもいとへ星の影 猿みの 泊船 句撰 句集元禄三

素堂の母七十に余り七としの秋七月七日にことふきするに、万葉七種をもて題とす。これにつらなるもの七人、此結縁にふれて各また七そうのに□(虫食い)ひにならむ。

万葉集に、詠秋野花二首 山上憶良

秋野爾咲く有花乎指折可伎数者七種花

芽文花乎花葛花・瞿麦之花・姫部志又藤袴・朝貌之花

△句撰に、尾花 嵐蘭 葛花 沾徳 撫子 曾良 女郎花 杉風

朝顔 素堂 秋翁

七株の萩の手本や星の秋 句撰 泊船 句撰拾遺 句集元禄五

小町か歌 文章の部に出、可見合。

高水に星も旅寝や岩の上 泊船 句撰 あらまき

玉祭

家はみな杖にしが髪の墓詣

前文文章の部に出五文字、一家みなとあり。元禄七年七月十五日、続さるみの・あらまき・泊船集・句撰・句集、かゝ国をへるとて、卯辰集二、熊坂といふ所にてとあり。

熊坂かゆかりやいつの玉まつり 笈日記 泊船 句撰 句集元禄二

木曾塚草庵墓所近て 一葉集に、鳥部山とはかりあり。

魂まつりけふも焼場のけふりかな

笈日記に是もいつれの秋にや。世の観応なるべしと云々。句集元禄

三 泊船集 句撰

尼寿貞か身まかりけると聞て

数ならぬ身とな思ひそ玉まつり 泊船集 句撰 句集元禄七

四十四丁

曙遺骨の画

贈桃隣新宅自画賛

寒からぬ露や牡丹の花の蜜 句集元禄七 泊船集 句撰

蓮池や折られて其まゝ玉祭 句集追加

露 稻妻

とくとくの清水 野さらし 泊船 句撰

露とくとく心身に浮世すゝかはや

二見の浦にて 句集貞享元 句撰拾遺

硯かところぶやくほき石の露 句集貞享元 句撰拾遺

画賛

西行のわらぢもかゝれ松の露 笈日記 泊船集 句集貞享五

今日よりは書付消さん笠の露 細道 句集 句撰拾遺 泊船集

李下に寄す

稻妻を手にとる闇の紙燭哉 句集貞享三 泊船集 句撰拾遺

あの雲は稻妻をまつたより哉 句集元禄二 あらの 泊船集 句撰

一葉集に、宿敦賀とあり。

・此哉ノ義にならんなるべし。などとあるべきを哉といへるあり。変格此句はたよりならんとあるべきなり。

粟津にて

稻妻や海の表をひらめかす 句集元禄四

稻妻や闇の方行五位の声 続猿 句集元禄七 泊船 句撰拾遺

蓮或知識の曰、なま禪大疵のもとひ

稻妻や闇の方行五位の声 続猿 句集元禄七 泊船集 句撰拾遺

知識の曰、なま禪大疵のもとかやいとありかたくて

いなつまにさとらぬ人のたふとさや 句撰 句集元禄四

句泊船集に此句の詞昼は己か光集に見へたりと云々。

きりきりす くさくさのむし

白髪ぬく机の下やきりぎりす 附合集 句集貞享四 句撰拾遺 泊

四十五丁

又酒堂か予か枕元にて軒をかきしを

床に来て軒に入るやきりぎりす

酒堂 初名珍碩後改珍夕、膳所の人也。元禄五年深川集を著。

猪の床にも入るやきりぎりす 句集 元禄七 あらまき

しつかさやゑかゝる壁のきりぎりす 句空消息

め淋しさや釘に掛けたるきりぎりす もとの水

むさんやな甲の下のきりぎりす 細道 猿蓑 泊船 句撰 句集 一葉集

●詠嘆の心は知るべしはのな、あはきなナトノな也▲去来抄にあな

むさんやな、とありしを後にあなの二字をぬき給ふとあり。ここに

出せる集共に は、あなの二字ぬきて出せり。貞盛(ママ)の討死

のなみなみならぬをふかくあはれむ心嘆息のな也。

本間主馬宅にて 続猿蓑に前書あり。文章之部に。出。

海士の家は小海老にまじるいとゞ哉 消息之部に。出。句集元禄三 猿蓑集

竈虫 キリキリス

泊船集 堅田にてと詞書き有

盆過て宵闇くらし虫のこゑ 小文庫 句集元禄四 泊船集 句撰

拾遺

胡蝶にもならて秋ふる菜虫哉 附合集 句集元禄四 泊船集 句撰

拾遺

鳴ほね柴や斯と見るより蝶の壳から もとの水 三碩へ消息

蜻蛉や取つきかねし石の上 笈日記に草の上 泊船集も同 句集元禄二

句撰拾遺

聴雨 泊船集

蓑虫の音を聞に来よ草の庵

句集に、いがはせを庵と前書、あん。是は深川なるべし。

句集元禄四 あらまき 句撰拾遺 続みなしくり

葬 女郎花

閑関之説 文章之部

山あさかほや昼は鎖鎖おろす問の垣 小文庫 泊船集 句撰拾遺

風俗文選

当麻寺

僧葬いく死かへる法の松 野ざらし 句撰拾遺 あらまき

嵐雪か画しに讚を臨れければ

朝貌は下手のかくさへ哀なり 句集貞享四 泊船集 句撰拾遺

更科の月見んと旅立ける頃、人々郊外に送りて盃をかたむけゝる。

朝貌は酒もしらぬさかりかな 笈日記 あらの 泊船集 句撰 句集

古せん

葬の花に鳴行蚊のやはり 拾遺 あらまき

四十六丁

深川閉関之頃

朝貌や是もまたわが友ならず 初便 拾遺 句集元禄六

和角蓼虫句

朝貌に我は飯くふ男かな 泊船集 句選 あらまき

○此句は去来抄其外諸集に其角の草の戸に我は蓼くふ虫かなトイフ句ニ対てイヘリトアリ。其角へ消息アリ。消息之部ニ出。△此句は智月へ消息ニアリトシテ附合集ニ、蒟蒻買に行朝の月トヤハリ翁ノ脇アリト云々。

ひよろひよると尚露けしや女郎花 更科紀行 句集 附合集 古セン

笈日記ニうけて露けしトアリ。 泊船集 句選 阿羅野 笈日記  
玉川の水になほれそをみなへし 句集追加 句選

消息、信州諏訪ノ自得ト云人所持ストイヘリ。其消息之写未得。

萩

小松といふ所にて

しほらしき名や小松ふく萩すゝき 附合集五十韻 をくの細道 泊船集

水亭雨中の会 句選 句集 あらまき

ぬれて行人もをかしや雨の萩 同五十韻連衆モ同 句集元禄二

句選

浪の間や小貝にまじる萩の塵 句選に萩の塵トアリ

○一葉ニ、萩の濱トアリ。 ○一本ニ、萩

小萩ちれます穂の小貝小さかづき 泊船集 句選 あらまき

萩原や一夜はやどせ山の犬 句集 貞享四

続みなしぐりニ、此通

此句、狼も一夜はやどせ菅の原(ママ) 又あらまきニハ、狼も一夜はやどせ萩のもと、トモ出たり。 泊船集ニ是はみなし。みなしぐりの頃の句也。あらまきには、本文の通り出たり。

画賛

しら露もこぼさぬ萩のうねりかな 句集元禄四 船泊集 句選拾遺

白露をトアリ。 去来へ消息

藤堂玄虎子の庭なかはに作りたるを見て

風色やしとろに植し庭の萩 句集元禄七 拾遺に、表六句ありと云々。  
萩の露米つく宿のとなり哉 後拾遺

木槿 鶉

花木槿はだかわらへのかさしかな 句選 あらまき

馬上の吟 文集 句集 泊船等ニ眼前トアリ。

道のべの木槿は馬にくはれけり

一葉に、道のへのトアリ 句選 古セン あらまき  
足軽町の外杉垣を通ればいわじ

四十七丁

の声さへ寂く(ママ) 一葉に、田莊酒家トアリ。

桐の木に鶉啼なり塀の内 猿みの 句集元禄三 泊船集 句選

此はし書、ある真蹟、越中高岡にありと云々。

●此なりは、にありノツツマリタルなりニ非ズ。

鷹の目も今や暮ぬと啼鶉 附句集元禄四 泊船集 句選

月

拾遺 延宝四辰、桑名氏何かしの催しに応し、渡部氏に会あり。

詠るや江戸にはまれな山の月

武蔵守泰時、仁愛を先として政以去欲先

明月の出るや五十一ヶ条 句集拾遺共に延宝

\*侘てすめ月侘笠の窓を宗として (誤伝) 句集 泊船トモニ延宝

・天和ノ頃

(侘てすめ月侘網笠の窓を家として『船泊集』)

月をわひ身を侘、つたなきをわびてわぶとこたへんとすれと問ふ人

もなし。猶わひわひて。

わびてすめ月侘斎がなら茶歌 句選

去来へ消息アリ。此消息ハ加賀の国なる左茶所持ト云々。

三日月や朝貌の夕つほむらん 泊船 句集トモニ延宝・天和ノ頃

我宿は四角な影を窓の月 句集貞享元 泊船集 句選

山寒し心の底や水の月 句選 あらまき

小夜の中山

馬に寝て残夢月遠し茶のけふり 此句尾陽巴丈方に画讚アリト云。

野さらし 句集 句選

外宮

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐 野ざらし 句選 句集

拾遺 貞享三題山家雨後月

月はやし梢は雨をもちながら かしま紀行 句集 あらまき

四十八丁

根本寺の隠室に宿かる人をして深省を発せしむ

寺に寝てまこと顔なる月見かな かしま詣 句集 句選

続みなしくりに鹿島に詣ける頃、宿根本寺

雲折々人を休むる月見かな 春の日 泊船集 句選 句集貞享二

続みなしぐり あらまき 小文

常陸へまかりける時、船中にて苦をあくれば。

明ほのや二十七夜も三日の月 句集 泊船集 句選 あらまき かしま詣

一葉集二、いささかなる處に旅立て、舟の中に一夜をあかして、

暁の空、篷よりかしらをさし出して一葉に、明ゆくや

座頭かと人に見られて月見かな 句集貞享二 泊船集

芋の葉や月待里のやけ畠 同上 拾遺

名月や池をめぐりて夜もすがら 句集貞享四 泊船集 句選 古セン

大曾根成就院の帰るさに

何事の見たてにも似ず三日の月

古せんニモ有と、あるたとへトアリ。  
句集貞享五

○此句ハ荒野集ニ朔日より、七日迄を題にして七人の発句あり。其内三日の句也。泊船集に、ありとあるたとひにも不似三日の月トアリテ、いつれの集にや何事のとありト云へり。

あの中に蒔絵書きたし宿の月

更科紀行 句集 句選 士の顔先見

姥捨山

佛や姥ひとりなく月の友

更科紀行 句集 泊船集  
小文庫ニ、姥捨て月の弁アリ。文章之部ニ出 あらまき

いさよひもまたさらしなの郡かな

さらしな紀行 荒野 泊船 句選

善光寺

月影や四門四宗も只ひとつ

句撰 あらまきニ名月やト有

中秋の月は、更科の里姥捨て山になぐさめかねて猶哀れさの目にもはなれずながら、長月十三やになりぬ。

四門は、発心門・般若門・菩提門・涅槃門、四宗ハ四ケの大寺なるべし。

木曾の瘦もまた直らぬに後の月

句集貞享五 句選

猿蓑 元禄二年つるがの湊に月を見て、氣比の明神に詣、遊行上人の古例をきよて、

月清し遊行のもてる砂の上

細道 泊船集 句集あらまき

名月や北国日和定メなき

細道 泊船集 句選 句集あらまき

悼遠流天有法師

その靈たまを羽黒にかへせ法の月

句集元禄二 句選

市振にて

一ツ家に遊女も寝たり萩と月

細道 泊船集 句選 句集

月のみか雨に相撲もなかりけり

句集元禄二 泊船 句選 あらまき

燧か山

義仲か寝覚めの山か月悲し

句集元禄二 泊船集 句選

湯尾峠 孫杓子

月に名を包みかねてやいもの神

句集元禄二 泊船集 句集

鐘ヶ崎にて

もとの水ニ、中秋の頃トアリ。後拾遺ニ、敦賀の宿にまふでければトアリ。

月いつこ鐘はしつみて海の底

句集元禄二 あらまき

○一葉リ、中秋の夜つるがに泊りぬ。主の物語りに、此海に鐘の沈みて待るを、国守のあまを入れて尋ねさせたまへど、竜頭、下さまに落て、引揚へきたよりもなしと聞て、

月いづこ鐘はしづめる海の底

木因亭

かくれ家や月と茶とに田三反

笈日記 句集元禄二 句選 泊船集

斜嶺亭戸をひらけは、西に山あり。伊吹といふ。花にもよらず、雪にもよらず、たゞこれ孤山の徳有。

そのまゝに月もたのまじ伊吹山

句集元禄二 笈日記 泊船集 句選

五十丁

伊勢国又玄か宅にとゞめられ侍

るころ、其妻男の心にひとしく、ものごとまめやかに見ければ、  
旅の心をやすまし侍りぬ。彼の日向守か妻、髪を切て席をまうけられ  
し心を今更に申出て、

月さびて明智が妻のはなしせん 句集元禄二

泊船集に此句の詞書、勸進帳に見えたりト云々。句選トあらまきニ、  
初五文字、月さびよナリ。

賤の子や稲すりかけて月を見る

・あらまきニ、すりわけてトアリ。

此句、かしま詣ニ出て、貞享四年の句也。句集ト拾遺ニハ、元禄三  
年トアリ。

正秀亭初会

月代や孫に手ををく宵の宿

(一本二内) 附合集ニ脇アリ。笈日記 句集元禄四

泊船集 句選

古寺翫月

名月や座にうつくしき顔もなし

卯辰集ト、一葉ニ、月見する座にト出たり。句集 あらまき 泊船集

句選

名月や湖水に浮ぶ七小町

○此二句ノ事、忘水集ニ湖水の名月也。はじめは名月や児達ならぶ堂  
の縁、又名月や海に向へば七小町としてよからずとて、名月や座にう  
つくしき顔もなし、といふ句になると云々。備の正奥が所持の翁の自  
筆には月見する座にトアリトイヘリ。一葉ニハ、名月や児達ならぶ堂  
の縁ト出タリ。

七小町ハ、双紙小町・通小町・雨乞小町・清水小町・卒都婆小町・関  
寺小町・鸚鵡小町等ナリ。句集元禄四 あらまき 泊船集 句選 初  
便ニ、名月や海にむかへば七小町ト云々。

月見賦 文章之部ニ出

米くるゝ友をこよひの月の客 笈日記 泊船集 句選

三井寺の門たゝかばやけふの月 月見賦ニアリ。句集元禄四 初便  
句選ニ、義仲寺ニテト有。

堅田十六夜之弁 文章之部ニ出

鎖明て月さし入よ浮身堂 笈日記 泊船集 句選

名月は二ツ有ても瀬田の橋(一に月)(一に、や)

いさよひや海老いる程の宵の闇 笈日記 句集元禄四 泊船集

やすやすと出ていさよふ月の雲 附合集 泊船集 笈日記 句選 句集

元禄四

柴の戸の月やそのまゝ阿弥陀坊 句選元禄四 句選 小文庫 泊船集

あらまき 文章之部ニ出

十三夜 石山に詣ける道

橋桁のしのぶは月の名残哉

此句ニ画賛アリ。画ハ橋にしのぶ也。天子の御文庫ニ納むトイイ伝フ。

旅窓長夜

五十一丁

九度起きてても月の七ツかな 句集元禄四 泊船 句選 あらまき ○

此哉ハ、哉ノ一例ニテ、詞ヲイレテはじめである事をトミルナリ。

三日月に地は臙なり蕎麦の花 句集元禄五 句選

○此句、泊船集二、三日月の記あり今略之ト云々。

名月や門にさし込潮かしら

一葉集二、深川卜前書きアリ。句集 元禄五 泊船集 句選 桃の  
実 あらまき

桂ハ、杉風・枳風が情を削り住居ハ曾良・岱水が物数寄をわぶ。猶、  
名月のよそほひにとて芭蕉五本を植えて。

芭蕉葉を柱に掛ん庵の月 句集元禄五 拾遺

深川の末五本松ちうふ所に舟をさして

川上とこの川下や月の友 続猿蓑 句選元禄六 句選

いさよひはとりわけ闇のはじめ哉 句集元禄六 附合集 泊船集 句選

あらまき

○此句、句集・あらまき・古選等に出せり。附合集二、取わけよトアリ。泊船集二ハ、取わけト、わずかにと二句出せり。濁子ノ句に、十三夜暁闇のはじめ哉ト云アル。数取わけよとなをされしや。

嵐蘭の初七日墓に詣 船泊集二、九月三日なりけらし云々。

見しやその七日は墓の三日の月 句集元禄六 あらまき 泊船 句選

東順傳 文章之部二出

入月のあとは机の四隅かな 船泊集二、句兄弟集二見ユとあり。

風俗文選 句集元禄六

伊賀の山中にて

元禄七年八月十五日ノ句也。

名月に麓の霧や田のくもり

句選に、花かとはかりトあり。

名月の花かと思えてわたはたけ 此句、続猿ミのに出テて、支考ノ評

ありそ海 泊船集 句選 句集

同国の蓑虫庵 右同月十六日の句也。

今宵誰芳野の月も十六里

伊賀上野ヨリ芳野へ十六里アリト云々。蓑虫庵ハ、伊賀五庵上野五  
庵一也。五庵ハ、東麓庵・西麓庵・無名庵・蓑虫庵・瓢竹庵。其内、  
蓑虫・瓢竹ノ二庵、今猶存。

元禄七年九月八日南都より、難波にわたる生玉辺にて、日をくらしして、

菊くに出て奈良と難波は宵月夜

・あらまきに、菊の香にトアリ。・句選に、菊月夜。

住吉の市に立て

升買て分別かはる月見哉 附合集 句集元禄七 泊船集 句選

住吉室の市、九月十三日之頃、人皆升を買てかえるなるべし。

五十二丁

其柳亭

秋もはやはらつく雨に月の形り 句集元禄七 泊船集 句選 笈日記

○此句、笈日記二、きのふから、ちよつちよつとあきも時雨かなとい

ふ句也。いかに思はれけむ。月の形にはなしかへ申されしト云々。

伊畦山亭にて月下に児を送るといふ題を置て。

月すむや狐こはかる児の供 句集元禄七 泊船集 句選

見る影やまた片なりも宵月夜 句集追加 泊船集 句選

句選、片敷



△此句、泊船集に阿叟、宗房と名のりたまひし頃の吟なり。短冊に見へたり。ト云々。

五三丁

木を伐て本口見はやけふの月 句集追加 泊船集 句選

夏かけて名月暑きすゝみかな 句集追加 船泊集 句選

名月の夜やおもおもと茶白山 句集追加

○此句、後拾遺ト一葉、おもおもと名月の夜や茶白山トアリ。

\*月澄て秋は入日のあとのふし(初出)

○此句ハ、元禄二年七月、越後高田細川昇庵宅ニ止宿ノ時、富士の

絵の讚也。

古将監の古実を語りて

月やその鉢の木の日のした面 附合集 もとの水

\*名月や霍脛高き遠干瀉 もとの水

\*名月や我を筆架のかげほうし もとの水

\*名月や我家に戻る門徒坊 もとの水

\*川舟やよい茶よい酒よい月夜 もとの水

\*水油なくて寝る夜や窓の月 消息の部 もとの水 (一葉)

\*初月や向ひに家のなき處 古せん 蕉句後拾遺 (一葉にも無)

\*三日月や名のなき山のなき處 古せん 蕉句後拾遺

\*名月やたしかにわたる霍の声 もとの水

隠士等哉坊にまみゆ おくの細道ニ云。越前福井の等哉歟

名月の見所問む旅寝せん 蕉句後拾遺

また明ぬこゝろはいかに窓の月 蕉句後拾遺

\*男ふり水香顔や秋の水(誤) 千那へ消息 後拾遺

\*物識の心問たし後の月(存) 後拾遺 あらまき

礎

礎打て我にきかせよ坊が妻 野さらし 句集 句選 あらまき

みなしくりニ、聞せよやトアリ。 あら野

猿引はさるの小袖をきぬた哉 句集元禄四 泊船集 句選 あら

まき

近江路をへる頃、日野山のほとりにて、故麻といふものに上の絹をとられて、

剥れたる身にはきぬたのひびき哉夕 古撰 拾遺

秋の風 野分

座右銘 文章之部に二出。

ものいへば唇寒し秋の風 風俗文選 句集元禄四 あらまき

句選 古せん

桃天の名をつけて

桃の木のその葉ちらすな秋の風 句選集元禄二 泊船集 句選 あらまき

○此人、加州山中温泉住人、桃枝齋ト号。幼名久米三郎。

牛部屋に蚊のの声よわし秋の風 小文庫 あらまき 泊船集 句選

附合集 句集元禄四

△此句、句集トあらまきニハ、牛部屋に蚊の声暗き残暑かなト有。小

文庫附合集 句選等に本文の通也。

越人

のさらしを心に風のしむ身かな 野さらし紀行 句集 句選 あらまき

猿を聞人捨子に秋の風いかに 野さらし紀行 句集 句選 あらまき

義朝の心に似たり秋の風 野さらし紀行 句集 句選 あらまき

秋かぜや藪もはたけも不破の関 野さらし紀行 句集 句選 あらまき

初便

身にしみて大根からし秋の風 野さらし紀行 句選

途中吟

あかあかと日は難面くも秋の風 おくの細道 泊船集 句選 あらまき

古せん

△此句、あらまきに前書、左のコトクアリ。旅愁慰めかねて物うき秋もややいたりぬれは、流石に目に見えぬ風の音いつれも、いとゝかなしくなるに、残暑やまざりければ、あかあかとひは、トアリテ、同書の注に、此句、はじめは、秋の山とありしを、北枝時にてはと申ければ、翁もさこ そと改められしと也ト云々。

嵐蘭誄 文章の部二出

五十三丁

秋風に折れてかなしき桑の秋 風俗文選 笈日記 句集元禄六 泊船集

追善

塚も動け我泣声は秋の風 細道 句集 泊船集 古せん あらまき

石山の石より白し秋の風 細道 句集 泊船集

宇治の中村といふ所にて

秋風や伊勢の墓原猶すごし

拾遺、伊勢の国中村、又宇治の中村と所を通るに、墓原のありけれ

ばトアリ。句集 元禄二年。

秋風の吹くとも青し栗のいが 小文庫二、初嵐ト題セリ。句集元禄四

泊船集 句選

暮秋の気色を

秋風や桐にうごいて蕪の霜

句集元禄四 小文庫 拾遺

○此句、初案ハ、桐うごく秋の終わりや蕪の霜トアリシヲ、後に改メラレント云。小文庫ニハ、初案のママ出セリ。拾遺ニハ、初案のママハガラ、下の五文字ヲ、蕪のくれと出セリ。

西東あはれさ同じ秋の風

句集元禄六 句選 あらまき

○此句ニ前書、去来のもとより、伊勢の紀行にて送りける。その奥に書けるとあり。笈日記に、いづれの時の秋にやありけん。去来、千子が伊勢詣の頃道之記書て、深川に送りけるに、奥書の褒美ありてトアリ。

千子は、去来が妹也。みなしくりニ、句多く出。

野水が旅行を送りて

見送りのうしろやさびし秋の風 句集追加

\*ややあきかぜ吹きとばせ松のむら紅葉(存疑) 後拾遺 あらまき

深川庵 一葉に、茅舎の感トアリ

芭蕉野分して盃に雨聞く夜哉 句集ト一葉に延宝・天和ノ頃

猪もともに吹かるゝ野わけかな 句集貞享三 泊船集 句選、千那へ消息あり。

吹飛ばす石は浅間の野わけ哉 さらしな紀行 あらまき 句選 泊船集

蘭 芭蕉

或茶店にて 笈日記に美人の図とあり

蘭の香や蝶の翅にたきものす 野さらし紀行 文章の部 句集 句選

敦賀 守栄院にて

門に入れば蘇鉄に蘭の匂いかな 笈日記 句集元禄二 句選 泊船集集

此寺は庭一はいのはせを哉 句集元禄五 句選

画讚

五十五丁

鶴啼くやその声に芭蕉やれぬべし 句集追加

### 蔦 柿

閑人芋牧亭

蔦植て竹四五本のあらしかな 野ざらし 句集 泊船集 句選 笈日記

棧やいのちをからむ蔦かつら さらしな紀行 泊船集 句選 句集 あらまき

・句集二、葛紅葉

命をからん、トヨムト云説アレドモ、ソハキコエガタシ。

蔦の葉はむかしめきたる紅葉かな もとの水

渋柿や一口はくらふ猿のつら (存疑) 句集追加 拾遺

片野望翠宅にて

里ふりて柿木もたぬ家もなし 句集

拾遺に、元禄七年八月七日夜、会歌仙ありと云々。

蒟蒻と柿とうれしき草の庵 (存疑) もとの水

堅田柳瀬可林亭 堅田に自筆アリト云へり。

\*祖父と親孫のさかえや柿みかん(初出)

句集二、祖父と親その子の庭や柿みかんとアリ。

### 菊

菊花の蝶

\*莊殿の柱によりて合歡の花 (存疑)

秋を経て蝶もなめるや菊の露 笈日記 句集貞享二 句選 あらたま

・一に、なり。・小文庫、霜卜有

草庵の雨

起上る菊ほのかなり水のあと 句集貞享四 泊船集 句選 続みなしぐり

・ホンノリトオキアガルナリ。

左柳亭

はやく咲け九日もちかし菊の花 附合集 句集貞享五 笈日記 泊船 句選

大垣 如行亭

瘦ながらわりなき菊のつぼみかな 笈日記 句集元禄二 泊船集 句選

続みなしぐり

句わりなきは、ココニテハ、ワカチナシテ意也。

菊の露落て拾へばぬかごかな 句集元禄二 泊船集 句選

九月九日乙州が一樽たつさへ来りければ

五十六丁

草の戸や日くれてくれし菊の酒 笈日記二、湖水三夜の月見とおなじ年

トアリ。句集元禄四 泊船集 句選 あらまき

見所のあれや野分の後の菊 句集元禄四 泊船集 句選 あらまき

田家にやとりて

稲こきの姥めでたし菊の花 句集 泊船集 句選 あらまき 笈日記

大門を過るとて

琴箱や古もの店の背戸の菊 句集元老四 泊船集 句選 あらまき

堅田の何某、木浣(慨)医師の兄の亭にまねかれしに、みづから茶をたて酒を進めてなされける。野菜八珍の中に菊花の膾いと芳しければ、

蝶も来て酔をすふ菊の膾かな

一本ニ、菊花の讚、折ふしは酔になる菊の膾かなと。句選と一葉ニハ、折ふしは酔になる菊のさかな哉ト有。

笈日記 素堂亭

陽蓮池の主、翁また菊を愛す。きのふは龍山の宴をひらき、けふはその酒酒のあまりをすゝめて、狂吟のたはぶれとなす。猶とふ、明年誰かすこやかならむ事を、

いさよひのいつれか今朝に残る菊

○消息の部、素堂は山口氏、名は信章。今日庵と号す。蓮池堂トモ号。江戸の人。北村季吟の門人。蕉翁ノ友、享保二年八月七十五<sup>ママ</sup>ニテ没。和漢の書 を嗜ム。主家ヲ辞して、深川の別荘ニ蓮池を掘也。交友ヲ集メ晋の惠遠力 蓮社ニ疑セシヨリ、俳家ニ専社中ト称スル。此等ニ依テ也。

いさよひのいつれか今朝に残る菊 句集貞享五 泊船集 句選

深川よりの文通に

いさよひの月と見はやせ残る菊 もとの水

岱水亭

影まちや菊の香のする豆腐串 句集・拾遺共二元禄六

八町堀にて

きくの花咲や石屋の石の間 句集元禄六俵

・句選ニ、岩屋 一に、故屋

汎蠡が趙南のころをいへる山家集の題にならう

五十七丁

草の戸や日くれてくれし菊の酒 句集元禄四 泊船集 句選 あらまき

泊船集ニ、西行か題す、菊のころといへる、山家集の題にならふ。

見所のあれや野分の後の菊 句集 泊船集 句選

一露もこぼさぬ菊の氷かな 続猿みの 句集元六 泊船集ト句集二ハ、

冬之部に

山中温泉 加賀

山中や菊はたをらぬ湯の匂ひ 細道 泊船集 句選

クラカリ 闇 峠にて

陰きくの香にくらかり登る節句かな 句集元禄七 泊船集 句選

・あらまきニ、峠かな

堅田の禅瑞寺

朝茶のむ僧しつかなりきくの花 あらまき

菊の香やならには古き佛達 句集元禄七 泊船集 句選

菊の香やならは幾代の男ふり 句集元禄七 泊船集 句選

○句この菊の香の二句、笈日記ニ、元禄七年九月九日ノ句ト云々。此

二句杉風へ消息トアリ。

園女亭

白菊の目に立て見る塵もなし 句集元禄七 句選 泊船集

附合集ニ歌仙アリ。翁俳諧の終也。

△支考か曰、園女が風雅の美をいへる一章なるべし。此日の一会を生前の名残と思へば、その時の佛も見ゆるやうにしらるべし。

## 茸

\*其句籠よりもるゝ松茸の (存疑) 後拾遺

松茸やしらぬ木の葉のへばりつく 句集元禄七 (元禄四)

松たけやかふれたほどの松の形 元禄四

・かふれた程は

○此句、そばはまだ花でもてなす山路哉、トイヘル句と同時の句也。

ト可見分。

はつ茸やまだ日数へぬ秋の露 句集元禄五

茸狩やあふなき事に夕しぐれ句

△此句、拾遺二画賛、伊賀にありしを今は湖原、辻村僧府上杉珍

## 相撲

むかしきけ秩父殿さへ相撲取 句集元禄四 泊船集 句選

許六が画に

\*勝角力いつも上手に米の飯 (存疑) もとの水

夏角髪やをくを出羽の相撲取 もとのみず

五十八丁

## 唐からし

大風のあしたも赤う唐辛子 (存疑) もとの水 あらまき

深川夜遊

青くても有べきものを唐からし 深川集 句集元禄五 泊船 句選 古セン  
かくさぬぞ宿は菜汁に唐からし 句選

木曾墳の旧草にありて敵戸の人に対す

草の戸をしれや穂蓼に唐からし 笈日記 句集元禄三 泊船集 句選

## 木の類

木曾の栃うき世の人のみやげかな 句選

全昌寺にて 加州大聖寺城下

庭掃て出はや寺に散る柳 細道 句集 泊船集 句選 あらまき

如水別墅

籠居て木の実草の実拾はゝや 句集元禄二 句選 泊船集 もとの水

橙や伊勢の白子の店さらし (存疑) もとのみず

遊女の画賛 除才之家珍

枝ぶりの日に日にかはる芙蓉哉 句選元禄二 泊船集

霧雨の空を芙蓉の天気哉 句集元禄四 句選 泊船集

山は皆蜜柑の色の黄になりて 泊船集 句選

## 草之類

後醍醐帝御陵

御廟年を経てしのぶは何を忍ぶ草 野ざらし紀行 句集 句選 あらまき

桑門已白亭に日ころありて

やとりせんあかざの杖に成る日まで 笈日記 句集元禄元 泊船集と句選にハ

夏の句云。

杉の竹葉軒といふ庵を尋て

粟稗にとほしくもあらず草の庵 句集 句選 泊船集

句・笈日記二、まつしくもあらず、ト。

附合集二、貞享五年戊辰七月二十日於竹葉軒興行トアリ。

五十九丁

越後高田、細川昇庵亭有真蹟

みちのく出羽の名所名所を見廻りて猶、北海の荒磯をつたひて、砂子  
あゆみくるしき越の長途に多病いとなつて、高田といふ所に至る。

此境に良い医棟雪とかや、風雅の聞へ遠く伝へたるを尋入て。

薬欄にいつれの花を草枕 句集 句選 泊船集

越中に入りて

早稲の香やわけ入る右は荒磯海

○をくの細道ト句選二ハ、加賀に入るトアリ。卯辰集二ハ、越中トア

リ・泊船集には、はしがきなし。

知足の弟金右衛門が新宅を賀す

よき家やすずめよろこぶ背戸の栗 附合集 句集元禄元

・泊船集ト句選二ハ、せとの秋

東寺を過るに

荻の穂や頭をつかむ羅生門 句集元禄四

鬼<sup>ほほづき</sup>灯は実も葉もからも紅葉かな 句集元禄四 泊船集 句選 あらまき

草いろいろのおのおの花の手酌かな 笈日記 句集元禄四 泊船 句選

画賛

鶏頭やや雁の来る時猶あかし 続猿蓑 句集元禄六 句選 あらまき

草庵二句 一句は、ひやひやと壁をふすへてと云句也。くさくさの部

二出。

道細しすまふとり草の花の露 句集元禄七 あらまき十三丁

松海堂西瓜の色に咲にけり 句集追加

○此句、泊船集二、相撲取草は葦草なるべし、と春季に入れ。秋の句  
たるや、と云々。笈日記二、去年の秋、文月のはじめふたたび旧草に  
帰りてとあり。しからば秋のスマフ草なるべし。

唐黍や軒端の荻の取ちかへ 同上 同上

一葉 故人に逢て

冬瓜やたがひにかはる貌の形 句撰 あらまき

六十丁

一葉くすし何かしの像

\*村雨を背中におふて柴胡掘 (存疑) もとの水

\*ただだておち穂拾はん関の前 (存疑) もとの水

国幾秋のせまりて罌粟にかくれけん もとのみず

続猿蓑 伊勢の斗従に山家をたはれて

蕎麦はまだ花でもてなす山路かな

浪にちりこむ青松葉 句集 笈日記 泊船集 句撰

○此句、笈日記九月二日、伊勢の国より斗従をいさなひて伊賀の山中  
へ趣く、是は難波津の□□の後、かならず伊勢にもむかへんとなり。

三日の夜、か しこに至る。草庵のまうけるいと心さびして、

そばはまだ花でもてなす山路哉

松茸やしらぬ木の葉のへばりつき

此、松茸を其の夜の貴題にとて、一歌仙あり。